

5. 急いではいけない書く指導

書きたがるまでは書かせない

漢字が読めて、それが何を意味しているかが解るようになると、大人のように、それを書いてみた

いという気持ちが出てくることもあるでしょう。

石井方式では、“書く”ことはなるべく遅く教えることにしています。子供がすすんで書きたがるまでは書かせないことにしています。しかし、子供が、どうしても書きたがるようでしたら、書くのに任せて、黙って見守りましょう。

筆順はでたらめ、形もめちゃくちゃでしょうが、黙って見守っているのです。幼児の描く絵をご覧ください。体よりも大きな頭、ひどいのは、頭から手が出、足が出ています。手の指だって、三本、六本、その時の都合でどうにでもなります。

そういう絵を描く子供に対して、字だけうまく書けと要求したところで、それは無理というものです。時期がくれば、だれが教えなくてもだんだん整った絵を描くように、お化けのような字も、だんだん整った形に

なっていくます。

今の学校では、漢字は“読む”ことと“書く”ことを同時に教え、同時にそれが出来るようになることを求めています。

石井方式では、“読み先習”、書く学習は後回しにします。

教わったばかりで、字形について認識が足りない時に漢字を書かせますと、一点一画ごとに、手本の漢字と見比べなければ書けません。

こんな学習を、何回繰返したところで、書く力は出来上らない、というのが私の考えです。

漢字が読めて、意味もよく解り、使い方もよく解り、しかもたびたび

コラム

部首 糸

繭から取った糸をより合せた象形字。

【約】 物を包んだ形の勺と糸との会意形声字。“包んだ物を糸でくる”こと。“ひきしめる”ことから「儉約」「節約」という使い方が生れた。

【納】 “外で乾かした糸を内にしまう”こと。「納入」「出納」。

それを読む機会を重ねることにより、目をつむっても、その漢字の字形が頭にはっきりと思い浮かべられるようになってから、漢字を“書く”指導を始める、これが石井方式です。

つまり、頭の中に書けるようになってから、それを紙に書くには、どこから、どういう順序で書くのかを教えるのです。

頭の中に書ける漢字ですから、一点一画、手本と見比べることもありません。いっぺんで正しく、美しく書けるようになります。

読み書き同時教育に比べて、なんと能率の良いことでしょう。同時教育では、なかなか書けるようにならないものですから、学校ではよく、「この字を十回書きなさい」とか、「ノートに一ページ練習してきなさい」とか、漢字書取り練習をよく宿題に出していますが、こんな学習をいくら繰返しても、本当の“書く力”は付きません。

赤ちゃんは、這い這いしている間に、手足の力を養い、やがて立って歩けるようになるのです。這い這い出来ないうちから歩かせたところで、歩けるようにはなりません。それどころか、足が曲ってしまって、足の力が育ちにくなります。

漢字も、読む学習を重ねている間に、字形の認識が深まり、それが

やがて書く力になるのです。これを同時にさせている従来の学習法は、“這い這い”と“あんよ”を同時にやらせる誤った教育法です。

コラム

部首 玉

三つの玉をひもで連ねたものの象形。

【現】 見と玉(王)との会意形声字。暗いところでも玉が輝いて見えるという意味で、“はっきり見える”こと。“あらわれる”こと。「出現」転じて“今”という意味にも使われる。「現在」「現代」。